

沖縄県八重山地方における〈低い島〉の稲作文化：波照間島の天水田における在来イネの栽培技術

古谷野, 洋子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

51

(開始ページ / Start Page)

169

(終了ページ / End Page)

199

(発行年 / Year)

2024-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030928>

法政大学沖縄文化研究所紀要「沖縄文化研究」五一号抜刷
二〇二四年三月三十一日発行

沖縄県八重山地方における〈低い島〉の稲作文化

— 波照間島の天水田における在来イネの栽培技術 —

古谷野 洋子

沖繩県八重山地方における〈低い島〉の稲作文化

——波照間島の天水田における在来イネの栽培技術——

古谷野 洋子

はじめに

本稿は、沖繩県八重山地方における〈低い島〉の稲作文化について、波照間島の事例から述べるものである。

日本最南端である同地方は一〇の有人島からなり、これらの島々は、その地質構造と形状から、〈高い島〉と〈低い島〉に分けられる。前者が石垣島、西表島、小浜島、与那国島であり、後者が竹富島、黒島、新城上地島、新城下地島、鳩間島、波照間島である。〈高い島〉とは山も川もある島であり、稲作に適する。〈低い島〉とは隆起サンゴ礁によって形成された石灰岩の扁平な島である。石灰岩の透水性は高く、降水は急速に地下に浸透するため地表水に乏しく、稲作には適さない⁽¹⁾。多くの

〈低い島〉の人々は〈高い島〉である西表島に水田を持ち、通ってコメを作っていた。このような農業を本稿では〈通耕作〉と記す。^②

波照間島は、八重山地方の〈低い島〉の中で唯一、島内で稲作を行っていた島である。〈低い島〉ではあるが、〈通耕作〉は行われず、島内で完結した農業を行っていた。^③ 同島では、アワ、ムギ、イモ（サツマイモ）などの栽培と共に、天水田でコメを作っていたのである。降雨を水田に溜め、その水を保持して行うイネの栽培方法である。

波照間島の農業に関する最も古い記録は一五世紀後半のものであり、『朝鮮王朝実録』（『李朝実録抄』）には、波照間島ではキビ、アワ、ムギはあるが水田はなく、稲米は所乃島（西表島＝筆者）より貿易するとある〔嘉手納解題・校訂 一九八一 五八六〕。同島でいつ頃から稲作が始まったのかはわからないが、寛文八（一六六八）年の「琉球國郷帳」によると、田高約三七石とある〔国書刊行会編 一九七八 三二〇〕。琉球国時代の宮古・八重山地方には人頭税が課せられていた。同島の稲作は上納のためであったといわれる。沖縄県となつてからも、これらの地方は琉球国時代の制度を踏襲する旧慣温存政策の下に置かれていた。^④ 明治二十五（一八九二）年の『沖縄県八重山嶋統計一覽略表・沖縄県八重山嶋役所調査』によると、^⑤ 同島のコメの収穫は四二〇石であり、寛文八年の収穫の十倍以上である。田は約六〇町歩であり、田面積は〈低い島〉の中では一番多い。^⑥

明治三十六（一九〇三）年に行われた沖縄県の地租改正によつて、人頭税は廃止され金納となつ

た。明治四十四（一九一）年の「琉球新報」の記事「波照間事情」には、「田は非常に多く反別マカか畑よりも多い。故に米は第一の産物である。然れども灌漑水のない為降雨なき時は殆ど收穫皆無と云ふ状況を呈せる。其の代り降雨がある時は米は非常に出来る」とある〔竹富町史編集委員会町史編集室 一九九四 四〇一〕。誇張はあるだろうが、稲作が盛んであったことがうかがえる。また、大正十二（一九二三）年の波照間島の地図では、島の西部と中央部に広い水田地帯が形成されているのがみられる〔古谷野 二〇二一 七七〕。

同島において稲作が盛んに行われていたことから、天水田に適した栽培技術が存在したものと考えられる。従来の天水田の栽培技術としては、一頭から複数頭の牛馬（主に牛）に田を踏み固めさせ、田の水の漏洩を防止するという踏耕（田踏み、床締め、代掻きなどと呼ばれる）に関するものがほとんどであった。諸記録に見る話者、また筆者が波照間島でお話をお聞きした話者たちも、複数回の踏耕がいかに重要であったかを語る。しかし、本稿ではイネの品種とその栽培方法から、天水田の栽培技術について述べる。

沖縄県で栽培されていたイネは、在来イネと「蓬莱米」に分けられるが、本稿では長い年月栽培されてきた在来イネに焦点をあてる。在来イネの名称はコメの名称と同じであり、末尾にコメを意味するマイ、あるいはメーが付くことが多い。だが、同一種であっても、報告者によって名称が多少異なる。引用の場合は報告者の表記に従った。なお、本文において一部の旧字体は新字体に直した。

年号表記に関しては、基本的に、元号表記を先に（ ）内に西暦を記した。

一 八重山地方、および波照間島の稲作についての従来の研究と本稿の目的

(二) 八重山地方、および波照間島の稲作についての従来の研究

八重山地方の稲作に関する主な論著としては、安溪遊地編著『西表島の農耕文化―海上の道の発見―』、渡部忠世・生田滋編『南島の稲作文化―与那国島を中心に―』、石垣稔『八重山在来米栽培体験記』(主に石垣島の稲作を扱っている)がある。西表島も与那国島も石垣島も、稲作に適した(高い島)である。⁹⁾八重山地方の(低い島)における稲作文化について扱ったものではない。なぜならば、前述したように、波照間島を除いた(低い島)の人々は、西表島に通ってコメを作っていたからである。

波照間島の稲作についての論考としては中鉢良護(「波照間の稲作」覚え書き)があり、同論考には、波照間島の稲作の始まり、水田の分布、上納田「カネーズ」の性格についての考察、イネの在来品種などが記されている。

波照間島の稲作に言及した論考としては、加屋本正一「波照間島の農耕と儀礼」、盛口満「波照間島・天水田と畑」、拙稿「波照間島の農耕文化―昭和三〇年代までの農業を中心に―」、大泊孝「第八章第一節 農業と製糖業」(「竹富町史 第七巻 波照間島」)などが挙げられる。加屋本は、イネの

農曆は他の農作物よりも一層不確実で、全く気象の如何に依存していると述べ、天水田の不安定な收穫について指摘している〔加屋本 一九七六 四六～四七〕。盛口は、同島出身の故島村修（大正十五（一九二六）年生まれ）からの聞き書きを報告している。島村は、牛を繋いで田を歩かせ田の床締めをする踏耕について述べ、天水田の收穫は不安定ではあったが、実るときはみごとに実ったという〔盛口 二〇一〇 四五〕。大泊によると、十月に田起こし、十一月から十二月に代掻きが行われたという〔大泊 二〇一八 六一九〕、代掻きは三回行われ、二回目には牛に大きな石を引かせて田を歩かせたという〔大泊 二〇一八 五九一～五九二〕。これらの論考のほとんどは同島の稲作は踏耕にたよる天水田であり、收穫は不安定なものであったという内容である。

しかし、踏耕という耕作方法だけが、天水田の栽培技術だったわけではない。拙稿（二〇一〇）でも同島の踏耕について報告したが、さらに、その年の雨の降る時期や雨量によってイネの種類を変えていたこと、早生のボーザマーが天候次第というリスクの多い農業では保険の役割をはたしていたと考えられることを述べた〔古谷野 二〇一〇 一八二～一八三〕。イネの特徴を利用した栽培方法も天水田の栽培技術の一環ととらえたのである。しかし、その詳細については充分述べられなかった。

また、拙稿「八重山における〈低い島〉の土地利用と畑の民俗名称―〈通耕作〉を行わなかった波照間島の事例から―」では、土地利用という視点から同島の天水田について言及している。

(二) 本稿の目的

八重山地方の稲作研究は稲作に適する〈高い島〉を扱ったものがほとんどだった。しかし、実際には〈低い島〉においても稲作は行われていた。〈低い島〉における稲作文化について論じること、同地方の農耕文化を考える上では必要であろう。

波照間島は八重山地方の〈低い島〉の中で、唯一、島内で稲作を行っていた島である。同島の稲作は、水がないため降雨にたよる天水田による稲作であった。天水田の栽培技術としては主に踏耕が挙げられてきたが、本稿ではイネの性質を利用した天水田の栽培技術について述べる。

扱う時代としては主に資料の残る明治後期から、同島で在来イネが消滅する昭和二〇〜三〇年代にかけてである。

二 波照間島の農業の概要とイネの栽培方法

(一) 波照間島の農業の概要

波照間島は、八重山地方最南端（日本最南端でもある）に位置し、面積約一三平方キロメートル、最高標高約六〇メートル、東西に長い楕円形の離島である。同島の農業の特徴としては、亜熱帯の〈低い島〉という地理的特徴以外にも、他の島々から遠く離れた離島であるという辺境性が挙げられる。辺境に位置する孤島ゆえに、飢饉に対する備えが重視されてきた。琉球国時代には、波照間島で

は凶作に備えてオオムギ・タカキビを作り共同で蓄えること、毎年ソテツを植えることという布達が出ていた〔石垣市総務部市史編集室 一九九二 五八・石垣市総務部市史編集室 一九九三 二三〕。穀物の貯蔵庫であったフツファ（高倉）は、昭和三〇年代まで各集落の周辺にあり（写真1参照）、コメ・ムギ・アワなどが蓄えられていたという。昭和二十九（一九五四）年、波照間島を訪れた金関丈夫は、「波照間の高倉は大きかった」という。ほとんどの田畑が天水に頼っていたので、「わずかの干天でたちまち収穫はゼロになる。穀物はこの島では一年分なくて、常に三年を見越して貯蔵される」からだという。穂をつけたままだと三年は貯蔵できるといふ〔金関 一九七八 一九〕。

また、畑の周囲にはソテツが植えられていて、アジア太平洋戦争後の食糧難の時代にはソテツを食べて生き延びたと人々は語る。

現在、同島の人口は過疎化が進み約五〇〇人であるが、一八世紀には約一五〇〇人以上の人々を、他の島々に集団移住させている。同島には多くの人口増加を促した高度な土地利用や栽培技術が存在していたものと考えられる〔古谷野 二〇二一 七四～七五〕。以下、同島の農業について拙稿（二〇二一）から述べる。

写真1：波照間島の高倉と天水田（1954年）



同島では、島の東西、高度、土壌などによって耕地を使い分けていた。土壌の関係で、「西の稲作、東の畑作」といわれた。島の西部には良い田があり、東部は畑作に適したという。実際は、島の中央部にも田が広がっていたが、「島の西側はいい田んぼ」といわれた。田を除いた島の大部分が切替畑（焼畑地）であり、島の東側には開墾用の広大な原野を有し、砂地の海岸付近は夏イモ畑として利用された〔古谷野 二〇二一 七五～八一〕。

沖縄県のかつての農業は、冬に播種し、台風の来る夏前に刈り取った。波照間島では十月～十一月頃に田畑の整地を行い、まずムギを蒔き、そのあとアワとイネを蒔いた。雨量の少ない年はアワ作りに重点を置いたという。そのため、農耕の基本はあくまでも畑作であったと考えられる〔古谷野 二〇二一 八二～八三〕。畑作の慣行栽培技術としては、焼畑、耕地環境の利用と活用、集約的作付け栽培体系（輪作・間作・混作）、アワの多種栽培などが挙げられる。だが、畑作が基本と考えられても、稲作は定着し、しかも盛んであったことはすでに述べた。

大正時代から昭和三〇年代まで、島の最も大きな現金収入源はカツオ漁であり、各集落で船とカツオ節工場を持っていた。主食はイモとアワとコメであり、コメは自給のために作られたといわれるが、豊作の年には販売したものと考えられる。島村修によると、豊作が続いたおかげで、自分たち兄弟二人は石垣島の中等学校を卒業できたという〔盛口 二〇一〇 四五〕。コメを売って得た現金収入をその費用にあてたのであろう。田の少ない家では、コメはハレの日に食べるだけであり、日頃は

イモやアワを食べていたという。自給できるほどのコメが作れなかったのか、作ったコメを売っていたのかはわからない。前掲の新聞記事にあるような「米は第一の産物」というわけではなかったが、単なる自給のためでもなかったものと考えられる。

(二) 波照間島のイネの栽培方法

波照間島ではどのようにイネを栽培していたのか。同島の農耕暦は台風と降水量と降雨の時期によって左右されていた(表1参照)。以下、故勝連文雄氏(大正六(一九一七)年生まれ)にお聞きした稲作の手順である。

同島では、十月～十一月に降る「カンロ(寒露か)の雨」で田に水を溜め、牛馬に田を踏ませて、田の底を甕の底のようにつるつるにして水の漏らない田にした。苗代期間は四十～四十五日だった。雨量の多い時は正月前には田植えをしたという。イネは晩生から早生の順に作っていたが、三月にクロキ(琉球黒檀)の若芽が出ると、もう播種はできなかった。イネの登熟期が台風の時期にあたるからである。

雨が順調ならば、田植え後はあまり手間がかからなかったという。刈り入れは台風が来る前、五月～六月にかけて行われた(しかし、梅雨の間の刈り入れはイネが干せないで避けられたという)。長い稲作期間であったといえよう〔古谷野 二〇一〇 一八二～一八五〕。

三 八重山地方、および波照間島で栽培されていた

在来イネ

(二) 八重山地方における在来イネとその種類

沖縄県では大正末期から昭和初期にかけて「蓬萊米」が導入された。「蓬萊米」の中でも台中六五号が普及すると、在来イネはほとんど消滅した。石垣によると、台中六五号は在来イネの二～三倍の反収があったといふ〔石垣 一九九二 五八〕。石垣島における台中六五号の導入は昭和初期であるが〔石垣 一九九二 五八〕、後述するが、波照間島ではかなり遅いようである。

沖縄県立農事試験場が在来品種の調査に着手したのは大正六（一九一七）年からであり、八重山郡で六種、宮古郡で二種⁽¹²⁾、沖繩本島の島尻郡で六種、中頭郡で六種、国頭郡で二種の在来水稻品種が報告されている。八重山郡の在来水稻品種は、アカブジャクマイ、フー

表1 波照間島の月別平均気温・月別平均降水量・主な稲作作業

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(℃)	19	19	21	23	25	28	29	29	28	26	23	20
平均降水量(mm)	116	121	128	136	176	151	126	192	198	165	161	106
特記事項	梅雨 台風の季節 カンロの雨											
主な稲作作業	田植・草取り・稲刈り (晩生～極早生の順)						なし			田起こし・代掻き・播種・育苗		

* 「沖繩県波照間の気候」(time-j.net online:hateruma)を参照した。

* 月別平均気温と月別平均降水量の統計期間は1981年178～2010年であり、本表では小数点以下は四捨五入した。特記事項・主な稲作作業はめやすである。

シクムチマイ、ウフシノー、ウシノー、シヌク、ダネーであり、これらのイネの特徴としては、芒がよく発達し、脱粒しにくく、草丈が高く、晩生であった〔盛永・向井 一九六九 二二～二四〕。よく発達した芒はイノシシや鳥の害に強いといわれる。脱粒しにくいということは籾がこぼれにくいということである。草丈が高いことと共に、水位の高い深田や天水田にとってはのぞましい性質といえよう。晩生は栽培期間が長いことである。

また、盛永俊太郎は、自身が収集した沖繩在来水稻一九品種を紹介しているが、その中に「波照間在来」という品種がある。これは無芒であり、実験結果によると「フェノール反応＋」（インディカを意味する）であった〔盛永・向井 一九六九 一五〕。

沖縄県立農事試験場によると八重山地方の在来水稻品種（以下、在来イネと記す）は六種類であったが、実際に栽培された在来イネの品種数はそれをはるかに上回る。『石垣市史 各論編 民俗上』には、石垣島で栽培されていた在来イネの梗には、アカウシイノー、アカブザマイ、イシヌグマイ、イネーマイ、ウシイノー、シイソーマイ、シヌクマイ、ダネーマイ、ナグアカカー、ナグアカフマイ、ハニジクルー、ピイニジイマイ、ピデイリイウシイノー、フースク、ムチイウシイノーなどがあり、籾にはシイシムチイマイ、フースクムチイマイがあったという〔石垣市史編集委員会 一九九四 四六三〕。農林技手であった石垣は、石垣島で栽培されていた在来イネとして一四品種を挙げ、その中のハティローンボージャーマイを極早生、備蓄用と記している〔石垣 一九九二 二〇〕。渡部は

与那国島在来イネとして一二種を挙げている〔渡部 一九八四 七七〕。安溪は、八重山地方で栽培されていた在来イネの品種名を四七種報告している〔安溪編著 二〇〇七 四四～四五〕。

八重山の在来イネの標本は、竹富島の歴史民俗資料館である喜宝院蒐集館でみることができる（写真2参照）。「八重山の在来米七種」と題され、イネのそれぞれの名称が記されている。写真ではイネの情報が伝えにくいので、写真をもとに図を製作し、左から1～7の番号を付けた（図1参照）。標本に記されていたイネの名称は、1. ウシノ、2. 羽地黒穂・ハナジクル、3. 名護穂赤、4. ピジルマイ・ピディル、5. シスムチマイ・ムチマイ、6. アハガラシ・ガラシマイ、7. ダネマ・ダネーマイである（後述するが、1～6は波照間島でも栽培されていた）。どのイネも長い芒を持ち、籾に毛が生えているようにみえるが、5. シスムチマイ・ムチマイは他のイネと比べて比較的芒が短い。

また、1. ウシノ、4. ピジルマイ・ピディル、6. アハガラシ・ガラシマイ、7. ダネマ・ダネーマイの籾は赤みが濃い。最も穂が長いのは、7. ダネマ・ダネーマイである。わずか七種類の標本からも八重山の在来イネの多様性がうかがえる。なお、2. 羽地黒穂・ハナジクル、3. 名護穂赤は、詳細は後述するが、大正末期以降に沖縄本島からもたらされた品種であるが、八重山地方の人々は八重山の在来イネと見做していることがわかる。

写真2 喜宝院標本「八重山の在来米七種」

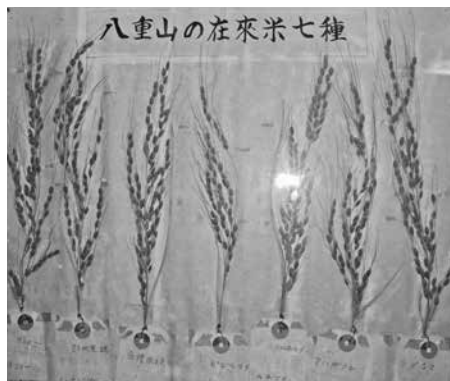
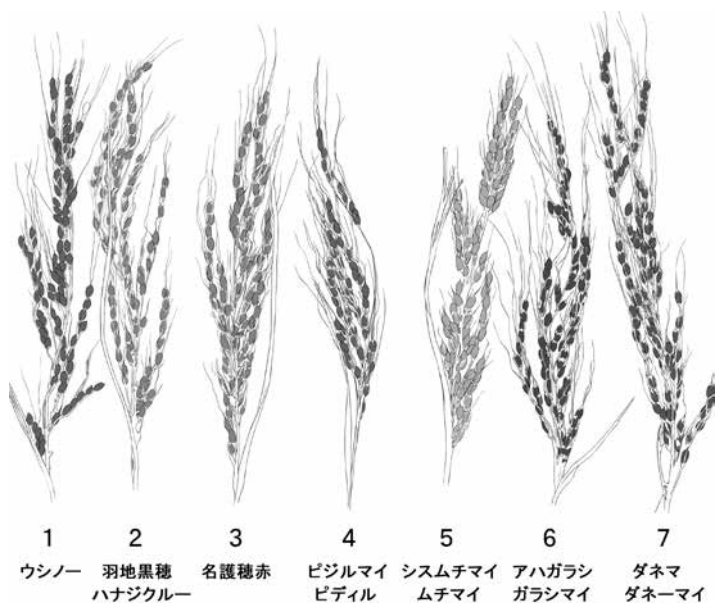


図1 喜宝院標本「八重山の在来米七種」



(二) 波照間島で栽培されていた在来イネの種類

波照間島では、在来イネには早生から晩生まであり、ボーザメを除いてヒゲのあるピーメ（「髭イネ」、長い芒を持つイネのこと）だったという。

中鉢は、イネの在来品種として、赤・白のモチ種（アガムスメー・ススムスメー）、ウスノー、ピジュル、ユノーマイ、ボーザマイ、名護穂赤を挙げている〔中鉢 一九九四 五〕。安溪は、波照間島で栽培されていた在来イネとして、アハガラシ、アハウシノー、ボージャーマイ、ハニジクル（羽地黒）、シスムチマイ、ウシノーを挙げている〔安溪編著 二〇〇七 四四～四五〕。ボージャーマイは無芒なので坊主と呼ばれた〔安溪 二〇〇七 三八〕。盛口は、栽培されていたイネの種類は一〇種類くらいあったと記しているが、報告している品種名はナゴアカ（名護赤）、シロムチ、アカムチ、ガラスマイ（烏米）、ウスノー、ボーザマイである〔安溪・盛口編 二〇一〇 四六〕。ナゴアカ（名護赤）は名護穂赤の事である。

筆者は、ボーザマイ、ヤマトマイ（ヤマトメー）、シツマイ（スツメー）、ピジルメーを報告している〔古谷野 二〇一〇 一八三〕。田を一町歩以上持ち、日常主にコメを食べていたという故勝連文雄氏からの聞き取りである。氏によると、ボーザマイは早生でパサパサして不味く、草丈も短く、反収も少なかったが、同島では重宝されたイネだったという。ヤマトマイは晩生であり、真っ白で、モチメがあり（粘りがあるの意味）、草丈は高く一二〇～一三〇センチになったという¹⁶。シツマイは白い

糯であり、ヤマトマイほどではないが、収穫まである程度の日数がかかったという。さらに、筆者は令和四（二〇二二）年に補充調査を行い、故阿利盛八氏（昭和九（一九三四）年生まれ）・静氏（昭和十（一九三五）年生まれ）夫妻から、ボーザメー、スツムチメー、アガムツスメー、ヤンバルメーの品種名をお聞きした。アガムツスメーはアカムチのことであり、多少赤みがある糯であったという。ヤンバルメーは栽培期間が長かったというので、晩生であろう。ヤンバルメーは「ヤマルメー」とも聞こえたので、故勝連文雄氏にお聞きしたヤマトメーの可能性もあると考えられるが、その後、故島村修氏に筆者が確認したところ、氏もヤンバルメーのことを覚えていた。穂は黒かったが中身の白いコメだったという。よって本稿では、ヤマトメー、ヤンバルメーの両品種を報告しておく。

中鉢・安溪・盛口・筆者の報告をもとに、表2「波照間島で栽培されていた在来イネ」を作成した。⁽¹⁷⁾ 在来イネの品種は同島への導入時期別にわけた。Aは明治以前から栽培されていたと考えられる品種、Bは明治以降に導入された品種、Cは導入時期が不明の品種である。名称は報告者や話者によって多少異なるので、本稿の統一名称を記した。また、それぞれの在来イネの糯稈性（糯と稈の別）、および早晩性⁽¹⁸⁾を付した。

Aグループは①アハウシノー・②ウシノー・③ガラスメー・④スツメー・⑤ピジルメーである。Bグループは、⑥ボーザメー・⑦アカムチ・⑧名護穂赤・⑨羽地黒・⑩ユノーメーである。同島における⑥ボーザメーの栽培は、明治初期に石垣島の新川の人が台湾へ漂着したおりに、台湾のコメを

持ち帰り、これを波照間島北村の東田家の人が貰い^{あがた}うけて作ったのが始まりであるという〔安溪編著二〇〇七 九三〕。⑦アカムチ・⑧名護穂赤・⑨羽地黒は、沖縄本島から大正末期以降に八重山地方に導入された品種であるという〔渡部 一九八四 七八〕。大正十一（一九二二）年発行の『水稻作の改良』によると、本県産二三種のうち、累年平均反当玄米収穫の最も多いものは名護穂赤、次が羽地黒であったという〔沖縄県立農事試験場編 一九二二 三〕¹⁹。⑩ユノーマーは八重山一般にはユノームチマイ（与那国糯米）といわれていたものであり〔渡部 一九八四 七九〕、中鉢によると波照間島には「近代」に入ってから導入されたものであるという〔中鉢 一九九四 五〕。

同島で栽培されていた在来イネの糯梗性については、④スツマー・⑦アカムチ・⑩ユノーマイは糯である。⑪ヤマトマーはモチメがあつたというが、糯か梗かは不明である。それ以外は梗と考えられる。早晩性については、筆者の調査と農学の論考から以下²⁰のことがわかる。②ウシノー・⑪ヤマトマー・⑫ヤンバルマーは晩生、④スツマー・⑧名護穂赤・⑨羽地黒は中生、⑤ピジルマーは早生、⑥ボーザマーは極早生である。⑦アカムチは中生、あるいは早生である。早晩性は環境の変化によっても変わるようなので、これはあくまでも目安である。①アハウシノー・③ガラスマー・⑩ユノーマーについては管見の限り早晩性に関する資料がみいだせなかつた。

在来イネはその特徴によつて使い分けられていた。④スツマーと⑦アカムチはハレの日（主に祝い事や葬式・法事）の餅作りに欠かせなかつた。⑥ボーザマーは酒造りにも使用された。ボーザマーが

表2 波照間島で栽培されていた在来イネ

分類	本稿の統一名称	本稿で報告された別称	糯稈性	早晩性
A	① アハウシノー	アカウシイノー	粳	—
	② ウシノー	ウシイノー、ウスノー、牛種米	粳	晩生
	③ ガラスメー	アハガラシ、ガラシマイ、ガラスマイ、烏米	粳	—
	④ スツメー	シイシイムチイマイ、シスムチマイ、ムチマイ、シロムチ、シツマイ、スツムチメー、ススムスメー	糯	中生
	⑤ ピジルメー	ピジルマイ、ピディル、ピジル、ピジュール	粳	早生
B	⑥ ボーザメー	波照間在来、ハティローンボーヂャーマイ、ボーヂャーマイ、ボーザーマイ、ボーザマイ、波照間坊主	粳	極早生
	⑦ アカムチ	アガムスメー・アガムッスメー	糯	中生、又は早生
	⑧ 名護穂赤	ナグアカー、ナゴアカ、名護赤	粳	中生
	⑨ 羽地黒	羽地黒穂、ハナジクルー、ハニジクルー	粳	中生
	⑩ ユノーメー	ユノーンムチマイ、与那国糯米	糯	—
C	⑪ ヤマトメー	ヤマトマイ	粳か糯	晩生
	⑫ ヤンバルメー		粳	晩生

A：明治以前から栽培されていたと考えられる品種。

B：明治以降、波照間島に導入されたと考えられる品種。

C：導入時期が不明の品種。

—は管見のかぎり早晩性の資料がみつからない。

酒造りに適していたわけではなく、不味いコメで酒を造ったからだという。モチメのないコメはモチメのあるコメと混ぜて食したようである。⑧名護穂赤と⑨羽地黒は反収を上げるために作られたのであろう。①アハウシノー・③ガラスメーは西表島祖納では極美味という評価であったと安溪はいう〔安溪編著 二二〇〇七 四六〕。

四 波照間島の在来イネの栽培技術

(一) 多様なイネの品種の導入と定着

安溪によると、八重山の各島々で栽培されていた在来イネの品種数は、〈高い島〉では石垣島(二二二)、西表島西部(二二二)、西表島古見(二二二)、小浜島(二四)、与那国島(二〇〇)であり、〈低い島〉では、竹富島(一七)、新城島(八)⁽²⁾、鳩間島(一三)、波照間島(六)である〔安溪編著 二二〇〇七 四四～四五〕。鳩間島、新城島、竹富島は西表島に〈通耕作〉していたので、この数字は西表島で栽培していた品種数と考えられる。

西表島と石垣島は、山と川を有する起伏に富んだ島であり、水田立地も多様である。特に西表島西部は自然環境も変化に富み、イノシシによる被害も多かった。このような地では栽培されるイネも適材適所であり、多様なイネが必要とされる。西表島に〈通耕作〉していた島々の栽培品種数が一〇種を超えるのも同様の理由である。波照間島で栽培されていた在来イネの品種は一二種と考えられ、他

島と比べれば多いとはいえない。しかし、同島の田が天水田とごくわずかの湿田²⁶であり、田の立地が比較的単純だったことを考慮すると、栽培されていたイネの品種は決して少なくない。むしろ多種栽培といえよう。これらの栽培種の導入と定着は、同島の栽培技術の一環である。

特にボーザメーの導入と定着は注目に値する。中鉢は、ボーザメーには耐干性があり、「干ばつの年には強く、収穫前、田に水がなくなっても、しっかり熟実した」という〔中鉢 一九四四 五〕。安溪は、「天水田ばかりで早魃に悩まされ続けた波照間島では、早生の品種が切実に求められ、イノシシによる害もなかったから、きわめて不味で低収穫という点を克服して定着したのであろう」という〔安溪編著 二〇〇七 五〇〕。

しかし、ボーザメーが必ずしも最初から八重山地方、および波照間島の農業環境に適していたわけではなかったであろう。導入当初は田植え後約五〇日という短い生育期間だったが、生育期間はだいに延び、六〇日余になったという〔安溪編著 二〇〇七 九三〕。インデイカであるボーザメーが、同地方の育苗植付期の低気温に最初から適応できたとは考えられない。また、天水田は水位が高いが、草丈の低いボーザメーをどのように栽培したのだろう。安溪は、西表島でもその短い生育期間を活かして二期作しようと何度か試したが、ほとんど収穫に至っていないという〔安溪編著 二〇〇七 五〇〕。しかし、波照間島の人々はボーザメーを定着させ、ボーザメーはハテルマボーザ²⁷と呼ばれるようになった。

(二) イネの早晩性を利用した多種栽培

波照間島ではイネの早晩性の特性を利用した栽培技術が発達していた。晩生のヤマトメーは収穫まで一二〇日かかったが、ボーザメーは六〇日しかかからなかったという〔古谷野 二〇一〇 一八二〜一八三〕。田植後の日数であろう。雨が順調なら、一月に晩生のウシノー・ヤマトメー・ヤンバルメーの田植えをし、次に中生のスツメー・名護穂赤・羽地黒を植え、次に早生のピジルメー、そして最後は極早生のボーザメーを植えたのであろう。⁽²³⁾ その間には、アハウシノー・ガラスメー・ユノーメーも植えられた。なお、中鉢によると、ボーザメーは生育期間が短いので年に二度蒔いても収穫できたという〔中鉢 一九九四 五〕。そして、台風の季節の始まる六月にはすべての刈り入れを終えた。このような栽培技術は長い稲作期間を有効に使うシステムであった。

一般的に多種栽培は、繁忙期の分散と調整に役立つといわれている。イネ栽培における繁忙期を調整するだけではない。同島ではアワの栽培も行われていたため、繁忙期の分散と調整は不可欠であった。しかし、同島の多種栽培の理由はそれだけではない。天水田におけるイネ栽培が降雨の時期に左右されることについてはすでに述べた。降雨の時期が遅いと、梅雨前、あるいは台風前には刈り入れをしなければならぬので晩生は作れない。その場合は、中生から田植えを始めた。それ以上遅れると、早生、極早生を作った。故勝連文雄氏によると、雨量の少ない年は四月まで植えたが、その場合はボーザメーを植えたという〔古谷野 二〇一〇 一八三〕。イネの早晩性を利用した天候不順に対

処する栽培技術である。同島が天水田であるがゆえに発達した栽培技術といえよう。

このような多種栽培は実はアワの栽培においても行われていた。勝連家では、畑の種類によってアワを作り分けていただけではなく、雨の時期と雨量によっても作り分けていた。「古谷野 二〇一〇一八六」。イネの多種栽培もアワの多種栽培の技術を応用したものであろう。

五 在来イネの栽培技術と天水田の消滅

すでに述べたが、沖縄県では大正末期から昭和初期に「蓬莱米」が導入され、「蓬莱米」の中でも台中六五号が普及すると、在来イネはほとんど消滅した。『町史 波照間島』には、昭和初期には台中六五号が導入され、収量が格段に良くなったとある〔大泊 二〇一八 五〇三〕。故勝連文雄氏は、「私なんかはあれがきてから別のものはもう作らんかった」という〔古谷野 二〇一〇 一八三〕。

故前野幸助氏（昭和四（一九二九）年生まれ）によると、「蓬莱米」は「戦後あたりに作ったのが最初」だという。氏の言う「蓬莱米」が台中六五号かどうかはわからない。さらに、戦後あたり（アジア・太平洋戦争後であろう）とはずいぶん遅いようである。しかし、昭和二十年代にも在来米が栽培されていたのは事実である。故島村修氏は、同島の小学校の教師時代（昭和二〇年代はじめ）に在来イネの標本を作ったことがあると筆者に語った。

八重山地方では「蓬莱米」によって二期作が可能になったといわれるが、波照間島では、下田原の

湿田を除いて、二期作はできなかった。天水田は停滞水のため、夏になると田の水が高温になってイネが栽培できないのであろう。しかし、在来イネよりはるかに反収のあった台中六五号の導入により、一部を残して在来イネは消滅した。引き続き栽培されたのは、ポーザマー、スツマー、アカムチであった。ポーザマーは種を切らさないため（どんなに重宝がられていたかがわかる）〔古谷野二〇一〇 一八三〕、スツマーとアカムチは餅を作るためであり、両品種は行事には欠かせなかったという。このように一部の在来イネは残ったが、在来イネ時代の栽培技術はほぼ消滅したといえよう。

琉球政府は昭和三十四（一九五九）年に糖業振興法を制定した。以後沖縄県ではサトウキビ栽培が県の主幹産業となる。波照間島では、昭和三十六（一九六一）年に波照間製糖株式会社が設立され、サトウキビ栽培が島の主幹産業となった。アワの栽培はサトウキビ栽培に代わり、⁽²⁵⁾天水田も切り崩されサトウキビ畑となった。⁽²⁶⁾

昭和四十六（一九七一）年度の『竹富町勢要覧』には、波照間島には水田は「なし」と記されている〔宮良 一九七二 四二〕。人々は、製糖業従事によって得た現金収入などで、石垣島で販売されていたサイマイ（細長い南方のコメだったという）を共同購入して食すようになった。現在では内地米を購入している。

まとめとして

沖縄県八重山地方の稲作研究は、主に、稲作に適する〈高い島〉を扱ったものだった。しかし、実際には稲作に適さないとされる〈低い島〉でも稲作が行われていた。本稿は、八重山地方における〈低い島〉の稲作文化について述べた。

波照間島は八重山地方の〈低い島〉の中で唯一、島内で稲作を行っていた島である。同島の稲作は天水田による稲作であった。降雨にたよる稲作のため、数年に一度は豊作になったが、早魃の年の収穫は皆無であったという。天水田の栽培技術としては、従来は踏耕に関する報告がほとんどであった。しかし、本稿では、「蓬萊米」普及以前に栽培されていた在来イネの品種とその栽培方法から、天水田の栽培技術について述べた。

波照間島で栽培されていた在来イネは、梗はアハウシノー・ウシノー・ガラスメー・ピジルメー・ヤンバルメー・ボーザメー・名護穂赤・羽地黒、糯はスツメー・アカムチ・ユノーメーであった。ヤマトメーはモチメであったというが梗か糯かは不明である。

イネの作期も晩生から極早生まで多様であった。これらの在来イネは同島の農業環境に合い、生活の中で必要とされたイネの特徴を備えていた。同島の田の立地が比較的単純だったことを考慮すると、多種栽培といえよう。

同島の在来イネの栽培技術としては以下の二点が考えられる。まず、多様な栽培品種の導入と定着である。特にインデイカのボーザメーの定着によって、早魃でも収穫皆無という事態を免れることができるようになった。次に、イネの早晩性を利用した多種栽培である。このような多種栽培は、同島の長い稲作期間を有効に使うシステムであり、繁忙期の分散と調整に役立つと共に、降雨の時期の遅れや少雨のような天候不順、また早魃に対しても異なる作期のイネで対処することができた。

以上、同島の在来イネの栽培技術をみてきたが、踏耕という耕作方法だけが、天水田の栽培技術だったわけではないことがわかる。本稿で述べた在来イネの栽培方法も天水田における栽培技術であった。

しかし、同島の在来イネの多くは、「蓬萊米」の台中六五号の普及によって消滅し、その栽培技術も消えた。昭和三十年代後半からサトウキビ栽培が同島の主幹産業となると、天水田は切り崩され、同島の稲作は終えんした。

【付記】

本文中にお名前を挙げた方々のみならず、波照間島の農業についてご教示くださった皆様に感謝いたします。在来イネの標本の写真の使用と図の製作を許可してくださった喜宝院菟集館、および波照間島の高倉の写真を提供してくださった酒井卯作氏に御礼申し上げます。イネに関しては樽本勲氏

(農学博士)のご助言を受けました。お名前を記して感謝の意を表します。さらに、本稿を執筆するにあたってご助言をくださった多くの方々に感謝いたします。在来イネの図は古谷野洋平が製作しました。

【注】

- (1) 〈高い島〉と〈低い島〉については小林茂を参照した〔小林 二〇〇三 五〇六～四〇〇～一四九〕。
- (2) 通耕作は必ずしも稲作のためばかりではなかったが、ここでは稲作に関してのみ扱う。
- (3) 石西礁湖(石垣島と西表島の間に広がる海域)の外に位置するため、〈通耕作〉は危険すぎて行えなかったものと考えられる〔古谷野 二〇二一 七三～七四〕。
- (4) 『朝鮮王朝実録』には、一四七七年に与那国島に漂着し、島々を経由して首里まで送られ、最終的に帰国した朝鮮人漂流民の記録がある。
- (5) 人头税とは琉球国時代から明治三十六(一九〇三)年まで、宮古・八重山地方および久米島において行われていた税制である。宮古・八重山地方では、一定の年齢に達した男女に課され、コメや雑穀、布で納められた。仲本信幸によると、明治期の波照間島では、二〇歳の男性の年貢米は二石四斗(約三二六〇キログラム)であったという〔仲本著・本田編 二〇〇四 三九〕。

(6) 国立国会図書館デジタルコレクション閲覧 <https://srsnd.goj.jp/books/R100000002100000092475400/2023.07.01>

(7) 崎山直は、竹富、黒島、新城といった島々にも水田面積が記されているが、これは西表島あたりへの通耕を意味しているのだろうかという〔崎山 一九七五 一二七〕。

(8) 「蓬莱米」とは台湾で生産された米の銘柄通称である。台湾各地の農業試験場では台湾在来種（インディカ）と内地米の交雑育種、また内地米相互の交雑育種によって、亜熱帯用品種の育成が企てられ、多くの優良品種が育成された。これらの品種は市場では「蓬莱米」と通称され続けた。やがて、「蓬莱米」の一群の中で台中六五号のみが、沖縄全土の代表的品種として長く栽培され続けた〔渡部 一九八四 七〇〜七二〕。

(9) 与那国島にも天水田はあった。松山利夫は、同島の天水田における踏耕の一連の作業を報告している〔松山 一九八四 二七七〕。

(10) 踏耕という耕作方法は、必ずしも天水田のみで行われていたわけではない。石垣は「田は牛馬に踏ませて水持ちを良くしたら米は上作となる」という諺があると述べ、田の底の保水力も高まりイネの成長にも良いという。そして、乾田でも、開田や荒田の手入れでも、ターフミ（田踏み）が行われたという〔石垣 一九九二 一七〕。

(11) カツオ漁は同島の伝統的な農耕暦のもとに行われ、夏のカツオ漁、冬の農業という半農半漁の形態が定着していた〔古谷野 二〇一一 一八八〕。

(12) 沖縄県に勸農試験場ができたのは明治十二（一八七九）年であり、明治四十二（一九〇九）年に県立農事試

験場となった〔盛永・向井 一九六九 一二〕。

(13) 宮古地方では稲作に適する土地は少なく、アワ作が主である。

(14) 芒とはイネやムギの穂の先端に出る突起状（ヒゲ状）のもの。

(15) イネの分類上利用される方法である。籾をフェノール水溶液に浸けておき着色の有無を調べる。着色すると＋、しないと－である。インデイカは＋に反応する。安溪はボーザー以外にも、ピジル、ウシノー、ダネマ、アハガラシを「フェノール反応＋」と報告しているが〔安溪編著 二〇〇七 五一〕、このようなイネの形質に関しては本論の趣旨からそれるのでこれ以上の言及はしない。

(16) 安溪によると、西表島古見で栽培されていた在来米としてヤマトウマイ（梗）があつたという〔安溪編著 二〇〇七 四一〕。

(17) イネの品種名は同島の話者に従い、同島の話者の挙げていない品種については報告者に従った。基本的にはカタカナ表記としたが、漢字名が定着しているものはその表記に従った。マイは同島のコメの一般的な呼称であるメーに統一した。だが、調査者の聞き違いの可能性もあり報告した品種名が必ずしも正確とはいえないことを明記しておく。

(18) 水稻品種はその栽培期間によって、早生、中生、晩生に大きく分けられる。このような特性は早晩性と呼ばれる。永松土巳・新城長有は、移植から出穂までの日数が、七九日以下は早生、八〇～一〇〇日は中生、それ以上を晩性としている〔永松・新城 一九六〇 一五三〕。

(19) <https://dl.ndl.go.jp/infondjip/pid/965552/2?tocOpened=1> (2023.07.01)

(20) ボーザメー、ヤマトメー、スツメー、ヤンバルメーは筆者の調査からである。沖縄県立農事試験場の大正八(一九一九)年の報告では、ウシノーは晩生、名護穂赤・羽地黒は中生、アカムチは中生あるいは早生であるという〔盛永・向井 一九六九 一二―一三〕。岡三徳たちの実験によると、ピジルメーと牛種米(ウシノー)は早生である〔岡・角・武田 一九八七 二六六〕。だが、ウシノーについては盛永・向井に従い晩生とする。

(21) 安溪は新城上地島と新城下地島を一括している。

(22) 下田原にわずかの湿田があり、ここでは二期作もできたという。

(23) このような多種栽培では、イネの実った田のそばで田植えをしている風景も見られた。前掲の明治四十四(一九一三)年の「琉球新報」の記事「波照間事情」には、「尤も珍しいのは現に収穫する米ありと思へば一方に植付をなすものもある」と記されている〔竹富町史編集委員会町史編集室 一九九四 四〇一〕。

(24) 拙稿(二〇一〇)では、「蓬莱米(六一〇号)」と記しているが、渡部忠世(一九八四)を参照すると六一〇号は存在しない。故勝連文雄氏の聞取りの内容からも、筆者の聞き違いで六五号であると考えられる。

(25) ムギは味噌や天ぷら粉を作るため、その後もしばらくは栽培された。

(26) 人々は、昭和三十(一九五五)年の早魃やその後の天候不順をきっかけに、「コメ作りに見切りをつけた」という。しかし、イネ栽培からサトウキビ栽培への変換には、行政の指導や波照間製糖株式会社の設立と波

照間製糖工場の設置が大きな影響を与えたものと考えられる。実際、田からサトウキビ畑の変換には同工場の職員があたっている。

【参考文献】

- 安溪遊地編著 二〇〇七『西表島の農耕文化―海上の道の発見―』法政大学出版局
- 石垣市総務部市史編集室編 一九九二『石垣市史叢書三 富川親方八重山島諸村公事帳』石垣市発行
- 石垣市総務部市史編集室編 一九九三『翁長親方八重山島藏元公事帳』『石垣市史叢書五 翁長親方・富川親方・両八重山島藏元公事帳』石垣市発行
- 石垣市史編集委員会編 一九九四『石垣市史 各論編 民俗上』石垣市発行
- 石垣稔 一九九二『八重山在来米栽培体験記』石垣稔
- 大泊孝 二〇一八『第八章第一節 農業と製糖業』竹富町史編集委員会編『竹富町史 第七卷 波照間島』竹富町発行
- 岡三徳・角明夫・武田友四郎 一九八七『水稻品種群にみられるシンク量とシンク／ソース比との関係』『日本作物學會紀事』五六巻二号 日本作物学会
- 沖縄県立農事試験場編 一九二二『水稻作の改良』国立国会図書館デジタルコレクション

<https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-1000000580611-00> (2023.07.01)

嘉手納宗徳解題・校訂 一九八一「李朝実録抄」谷川健一他編『日本庶民生活史料集成第二七卷 三国交流誌』

三一書房

金関丈夫 一九七八『琉球民俗誌』法政大学出版局

加屋本正一 一九七六「波照間島の農耕と儀礼」『八重山文化』四号 東京・八重山文化研究会

国書刊行会編 一九七八「琉球國郷帳」『続々群書類従 第九地理部』続群書類従完成会

小林茂 二〇〇三『農耕・景観・災害―琉球列島の環境史―』第一書房

古谷野洋子 二〇一〇「波照間島の農耕文化―昭和三〇年代までの農業を中心に―」『比較民俗研究』二四号

比較民俗研究会

古谷野洋子 二〇一一「八重山のカツオ漁を巡る生業ネットワーク―波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを

中心に―」『沖縄文化研究』三七号 法政大学沖縄文化研究所

古谷野洋子 二〇二一「八重山における〈低い島〉の土地利用と畑の民俗名称―〈通耕作〉を行わなかった波

照間島の事例から―」『沖縄文化』五二巻二号 沖縄文化協会

崎山直 一九七五「明治前期八重山の概況―「沖縄県八重山嶋統計一覧略表」について―」『八重山文化』三号

東京・八重山文化研究会

竹富町史編集委員会町史編集室 一九九四『竹富町史 第十一卷 資料編 新聞集成Ⅰ』竹富町役場

中鉢良護 一九九四「〈波照間の稲作〉覚え書き」『会報 波照間文化』三号 波照間文化協会

- 永松土巳・新城長有 一九六〇「沖繩在来稲の分類に関する研究第一報 形態的・生態的特性による分類」琉球大学学術リポジトリ http://hdl.handle.net/20_500_12000_25037 (2022.10.21)
- 仲本信幸著・本田昭正編 二〇〇四『波照間島の歴史・伝説考―仲本信幸遺稿集―』私家版
- 松山利夫 一九八四「与那国島における水田の分類と在来の稲作農具」渡部忠世・生田滋編『南島の稲作文化―与那国島を中心に―』法政大学出版社
- 宮良高弘 一九七二『叢書 わが沖繩別巻 波照間島民俗誌』木耳社
- 盛口満 二〇一〇「波照間島・天水田と畑」安溪遊地・盛口満編『聞き書き・島の生活誌③ 田んぼの恵み―八重山のくらし』ポーターインク
- 盛永俊太郎・向井康 一九六九「沖繩諸島の在来イネ」『農業及び園芸』四四卷一号
- 八重山嶋 一九九四『沖繩県八重山嶋統計一覧略表・沖繩県八重山嶋役所調査』国立国会図書館デジタルコレクション <https://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-100000092475400> (2023.07.21)
- クシモン 生田滋編 一九八四『南島の稲作文化―与那国島を中心に―』法政大学出版社
- 渡部忠世 一九八四「八重山のイネの系譜―蓬莱米と在来稲―」渡部忠世・生田滋編『南島の稲作文化―与那国島を中心に―』法政大学出版社
- Time-jnet 「沖繩県波照間の気候」 <https://weather.time-j.net/Climate/Chart/hateruma> (2023.7.21) (2023.07.21)